明日を語ろう！

北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO

北海道農業に限りない愛情を注ぎ、
たゆまぬ努力を続ける人々がいます。
農業の未来を創造する「北の農業人」の
情熱や取り組みをご紹介します。

●飼料の安定供給で酪農経営の未来を拓く

未来を見据えた組織的な運営で、農家の負担減と経営の安定化を図る。「これからの酪農経営を模索しながら地域の産業を守っていくのが使命」

［中標津町］

有限会社中標津ファームサービス
代表取締役
長渕重樹さん

●長渕さんは戦後開拓で中標津に入植した農家の2代目。平成に入ってすぐに経営を引き継ぎ、畑作中心から酪農に専業化しました。「今は会社の運営に専念していて、うちのことは妻と息子に任せっきり。家族には頭が上がりません」

飼料の安定供給を担うTMRセンターの設立

日本の酪農は家族的な経営スタイルが多く、給餌や搾乳、飼料の生産など、1年間を通してほとんど休みを取れないのが実状です。そうした農家の負担を軽減するための切り札として、北海道ではTMRセンターの設立が相次いでいます。

TMRとは「Total Mixed Ration（完全混合飼料）」の略で、牛に必要な栄養原料を調製した飼料を意味します。TMRセンターはその飼料の生産や製造、配送などを受け持つ組織です。飼料に関する作業をセンターに委託することで、農家には作業や経営コストの低減などのメリットがあります。

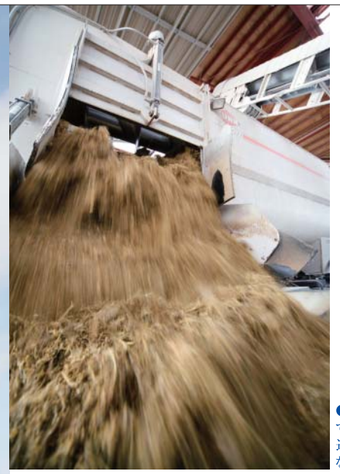
今回訪問した「中標津ファームサービス」は、中標津地区で初めてのTMRセンターとして、平成18年1月に設立されました。根釧農業試験場による調査・研究などのバックアップもあり、会社設立には地域の農家18戸が参加。同年12月からTMRの製造・配送がスタートしました。

設立のきっかけになったのが、飼料用トウモロコシの露地栽培でした。中標津周辺ではトウモロコシの栽培は困難とされていましたが、飼料コストの安定化やサイレージの質の向上を考えると、トウモロコシの導入は必然でした。同社の代表取締役を務める長渕重樹さんは、「酪農を守るためにも、トウモロコシ栽培に組織として取り組む必要がありました」と振り返ります。

画期的な配送システムと品質管理によるメリット

設立準備には約2年間をかけ、組織の運営システムを構築しました。綿密な飼料生産計画や専門のコンサルタントによる飼料設計、効率的な飼料製造ラインなどが功を奏し、運営はスムーズに進みました。

特に長渕さんが「他のセンターに先駆けた画期的なシステム」と自慢するのが、飼料の配送方式。それまでは、ラップ梱包かバラで農家の軒先に届けていた飼料を、直接、各戸の給餌車に入れることで、給餌に伴う作業を大幅に減らしました。「昔は朝早く起きて、飼料を準備していましたが、今は、朝起きると給餌車に飼料が積まれた状態になっている。これは好評でした」



●調製庫ではミキサーフィーダから、できたてのTMRが配送用トラックへと送られていきます。場内中にさわやかなサイレージの香りが漂っていました。

●巨大なミキサーフィーダと、フスマやトウモロコシなどの種類ごとに分かれた飼料タンク。飼料タンクの下を通るミキサーフィーダに、必要な原料が投入されていく仕組みになっています。

集約的に管理することで、飼料の質や収量の向上も図っています。現在、グラスサイレージの収穫面積が約800ha、とうもろこしサイレージは約300haありますが、作付け指導や収穫調整を行い、質や収穫時期のバラつきを大幅に解消しました。ただし、トウモロコシ栽培は天候に左右されることが多く、収量を安定させるのがこれからの課題、と長渕さんは話します。

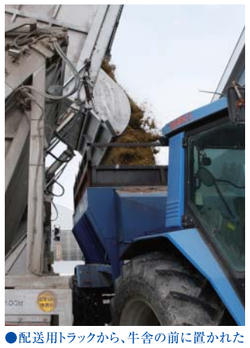
また同社では、専任の職員を雇用して飼料の調製や配送を行っています。大半が農業に携わったことのない地元の人で、新たな雇用の創出という効果も生まれています。

次の世代につなげるため夢の持てる酪農環境を

同社では早朝と夕方の1日2回、TMRの配送を行っています。朝は4時頃から、午後は昼過ぎからセンターの調製庫で製造し、できたてを各農家に届けます。このシステムによって、特に夏場に悩まされていた飼料の質の低下（変敗）を防ぎ、また、こまめに飼料調製も行うことで、搾乳牛1頭あたりの年間乳量が増加しました。

調製庫を見学させてもらうと、夕方の配送に合わせてTMRを製造しているところでした。巨大なミキサーフィーダに原料となるサイレージやフスマ、トウモロコシなどが次々に投入され、混ぜ合わされていきます。そのまま調製庫に入り、ベルトコンベアでTMRを配送用トラックに積み込む一連の作業は無駄がなく、実にシステマチック。「農家の反応が直にわかるから、飼料の質にはシビアになった」という長渕さんのこだわりが現場にも浸透していました。

「繁忙期には農家の子どもたちも手伝いに来て、わいわいやりながら世代を超えた人間関係を築いています。次の後継者を育てる場にもなっているようです」と長渕さん。酪農の集約化と効率化をめざすTMRセンターは、地域の酪農経営を支え、未来へとつなげる役割も果たしています。



●配送用トラックから、牛舎の前に置かれた給餌車に直接TMRを移す方式は、「中標津ファームサービス」が初めて導入しました。これによって、農家の給餌にかかる時間は大幅に短縮され、労働負担の軽減も実現しました。

●栄養バランスのとれた飼料設計が行われ、常に新鮮な飼料が供給されることで、1頭あたりの乳量も増加しました。

●TMRはできたところから、2台の配送用トラックでピストン輸送式に農家へと配送されます。配送を効率化するため、18戸の構成農家がセンターを中心に7キロ四方と集約されたエリアにあることも大切な要素でした。